

卒 業 論 文

青少年と音楽放送

新制四回生

宮 本 靖 子
小 山 不 知 子
杉 山 博 子

シムフォニーとジャズと長唄——こういう組み合わせはどの国を訪ねてもきかれるものではない。これは戦後の日本に出来た社会形態の一つであり、又我が国であるが故にみられる状態なのである。一方、二十世紀の今日、ジャーナリズム、マス・コミュニケーションというものは人間の社会生活に大きくクローズアップして来たものである。朝に夕に音楽を電波にのせているラジオも亦一つのマス・コミュニケーションとしての大きな役割を果している。放送される音楽はシムフォニーといわずジャズといわず我々の生活を樂しませ喜びと慰めを与えてくれている。ラジオが働かかけていると同時に人間即ち社会も時代もそれらを求めているのである。大衆の求める音楽、そしてラジオの与える影響、これは社会に大きな意義をもたらすと同時に種々なる社会問題を提供している事は見逃せない事実である。

そこで私達は、マス・コミュニケーションの一形態としての音楽放送をとらえてそのマス・コミュニケーションの影響と音楽放送の社会的意義、放送ジャーナリズムの実態を青少年を対象とする調査から考察し分析して行つたのである。

人間と音楽——音楽と社会

マス・コミュニケーションの影響云々と言う事に何故音楽が必要であり論題になるのかと言う問題が当然考えられる。

人間が感情をもっている以上音に対して無感覚ではあり得ない。近代の或る学者は音と言うものがすべての美的判断とは無関係に我の身体組織に作用するものであると言っている。と言う事は感覚を支配するものである事を言っている。フランス語では音楽は表現する (exprime) とか、翻譯する (traduit) とか *écrit*、又ドイツ人の間では、音楽は情緒の言語であるとか、感情の芸術であるとか、音楽は感情の生活を描写する (*darstellen*) とか、感情を把握する (*grasieren*) とか……と言っており、音楽は感情に動かされる精神の状態とそれが精神の与える情緒であると言うのである。こういう事は音楽と感情とが密接なる関係にある事を物語っている。

ならば、音楽が精神生活の重要な一部分となつてくる事は当然であり、外界から得る音に対して何らかの感情をもち反応するわけで、音楽が人間生活に大きな影響を与えている事がわかる。故にこの反応の程度 (内容、強さ) が問題になつてくるわけである。

又一方、歴史をふりかえつても音楽の起源というものは、人々の折りの声が礼拝の歌となつた事に始まり中世紀になつて教会音楽という形でもつて発展しその後人間生活の感動を自由に表現するものとして教会音楽とは異なる世俗音楽へと発達して行つたのであつた。

そして又音楽の本来の意義即ち人間と人間とを美しく温かく結びつける役目から考えても人間生活からはなれる事の出来ない尊い芸術として存在し、人間が集団でコミュニケーションとして存在する以上

卒業論文

社会生活としても切りはなす事の出来ないものとなつて来たのである。

百二十年の昔、ウイーンの人々が、シューベルトの歌を愛し心の種とし生の喜びを味わつていた。又フォスターの歌もそうであつた。そして今もなお彼等の歌を愛し続けている。誰も歌う事を強制したわけでもなく命令したわけでもない。全ての良い音楽を大衆が求め、そして味わうのである。大衆の心が支持する処に価値が生れる。

大衆の求めるものは、先ず与えられる事である。与えられる事が第一でやがてそれに自然な機能として選択と価値づけが生じて来るのである。この選択と価値づけと言う事が、音楽鑑賞と言う活動を通じて音楽生産に大きな役割を果たしている。即ち大衆が受け手、きき手にまわつてゐるだけでなく鑑賞を通じて批評をするわけでそれは次への音楽的創造に役立つ事になる。故に芸術的創造というものは、芸術家の力と社会の力が交流する処に生れる、と言う社会的事実となつて社会的意義が与えられる。故に

「社会の中に音楽は存在し生きてゐる」のである。

マス・コミュニケーションに於ける音楽放送

ラジオのダイヤルをまわして音楽をきくと言う事は、もう日常茶飯事の一つとして意義を新たに感じるものはおそらくないであろう。しかし音楽を電波にのせられる様になるまでは、一つの演奏会をその会場できく二千五百人とする限度であつたものが今では少なくとも五百万人はきいてゐる事になるとすると、ラジオが一千倍乃至数万倍にその聴衆を拡げた事になる。これがマス・コミュニケーションの社会現象である。

そもそもマス・コミュニケーションとは、「今日大衆の社会態度、イデオロギーを直接間接に規定する最も重要なコミュニケーションの形態である」とある。然るに、社会に存在する事、生じた事、すべてが目と耳により社会人に伝えられ、社会人は、それを受け入れてそれに社会的意義とそれに対する評価を与えて初めてコミュニケーションとしての働きをなすわけである。故に、ラジオが声と音のジャーナリズムとして存在し、マス・コミュニケーションの重要な役割をしめてゐる事になる。そこでこのラジオが、その対象を無制限にもつてゐる事に問題があるわけで、この無制限に多くの聴衆をもつラジオとしては、教養趣味の異なる、文化水準の異なるあらゆる層を一通り満足させなければならぬわけである。故に、音楽放送が日本においては、特に種々雑多である事が納得出来る。種々雑多の音楽と言つても大きくわけて洋楽と邦楽とにわけられる。又洋楽も、純粋音楽と娯楽音楽とにわけられる。

洋 楽
 純粋音楽（古典音楽、近代音楽、ポピュラー音楽）
 娯楽音楽（軽音楽、歌謡曲、流行歌）

浪 曲

邦 楽
 俗曲、義太夫、長唄、小唄、歌詠、民謡、謡曲、

純粋音楽としての洋楽は、人間の求めるもの、民衆の求めるものとして一つの芸術的に高い音楽形態を生み出して行つたものであり、娯楽音楽に属する洋楽は、ジャズ、流行歌をいう。こういう音楽が大衆の求めるままに放送されているのが現在の状態である。

教育音楽

此処で論題の青少年と言う事が問題となつてくる。社会を構成し

文 論 業 卒

ている人間には、次代を背おうべき青少年がいる。何故青少年がその対象となるのか。人間の一生を或る程度支配するものは、その生い立ちの期間にあるわけで、青少年期は、特に精神発達上危機の段階にある。この時代の環境とか外界の影響が非常に大きく全人生を支配する事がわかる。この青少年が教育期間にある事から教育音楽という事がとりあげられるわけである。そこで音楽の接觸の仕方について計画的と自然的とあり、計画的なものとして音楽教育が出て来る。又音楽放送の中に現在行われている学校放送というものも音楽放送としての計画的なもの一つとしてあげられる。学校という範疇にあつて、教師がピアノをたたき指揮をし、音楽を論じる事のみが教育音楽と言うものではなく、学校放送の音楽番組による教育音楽と言う事は、聴覚教育としても亦、マス・コミュニケーションの役割から言つても意義のある事である。教室にラジオの設備、これこそ聴覚教育の現代版である。

調査の視点及び方法

以上、現在日本に於て一般民衆の間に最大の人気をもち続いているジャズ、流行歌の問題を見た時、それが生活の悲哀と憂愁とから出発し、生と性に対する激しい衝動的な欲求の表現となつて今日の如くになつた事、そして又音楽放送自身の影響が良きにつけ悪しきにつけ種々な社会現象を起している事を思えば、この問題は学校教育の観点からも、社会教育的観点からも大きな社会問題として真剣に考えざるを得ない。

特に、ジャズ、流行歌の隆盛が身心共に危機の段階にある青少年にとつてどの様な精神的肉体的影響を及ぼしているかを考えた時、

青少年の育成にあつては、学校及び家庭は情操教育の目的たる音楽教育に対してどの様に対処しているか、そして青少年は人間形成に於ける音楽効果を十分身につけているかが問題となつて来る。

それ故に我々は、「学校及び家庭は中学生の情操教育向上に対する役割をはたしているか」と云う視点のもとに、学校——学校放送に於ける音楽放送及び一般ラジオ音楽放送について音楽教師と Home room teacher に指導者としての立場と個人としての立場からそれぞれ所見を述べてもらう——と家庭——青少年をとりまく家庭に於て、どの様な放送をどの様に聞いているか、家庭に於てどの程度の見解があるか、そして関心度はどうであろうか——即ち、子供の教育的立場からとその家庭の音楽的環境から検討し、一方生徒には学校の現状面及びその関心度にもなつて学校放送の音楽放送や一般音楽放送について記してもらつた。

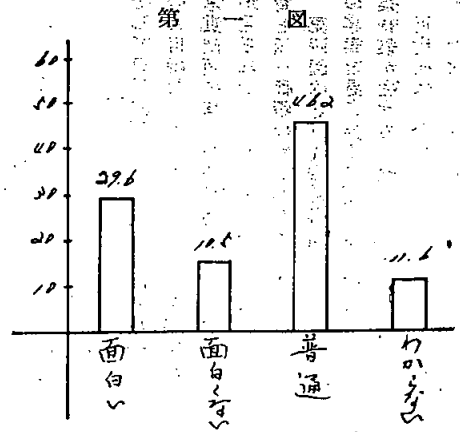
調査実施方法について細かい事は省略するが都内二十三区内の公立中学校に於て当時音楽放送実施中の学校から四校抽出した。

調査結果の分析及び考察

学校放送の中でどんな番組が好きかを調べた結果、音楽放送と答えたものが約二割にしかあつていない。そこで質問「学校放送の中の音楽放送を面白いと思ひますか」から学校放送の中の音楽放送に対する問題点を見ようとしたものである。

学校放送の音楽放送は、音楽的価値即ち音楽を通して生徒の日常生活経験と結びつき、そして十分生かされるよう放送を通して指導されるものであるが、第一回の如く音楽を面白いと主張している生徒が約三割しかいないと云う事で生徒の音楽放送に対する態度を高

卒業論文

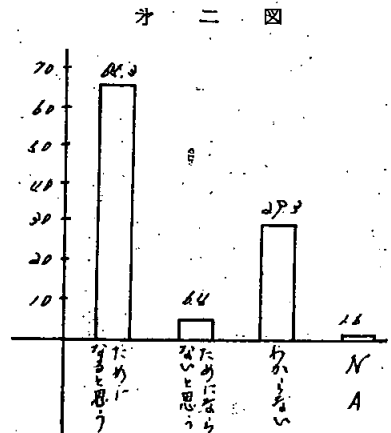


問 学校放送の中の音楽放送を面白く思いますか、又は面白くないと思いますか。

く評価するわけにはいかなう。なぜ面白くないのか。その理由として、興味がない、音楽が嫌い、理解出来ない、皆がうるさい、等の理由がある

られる。その根底を考えた場合、先ず学習指導法の欠陥があげられる。と云うのは、興味がなく又嫌いだであると云う根本から音楽をうけつけない生徒に、生活から引出された即ち日常経験、感情生活と結びつけた音楽指導法を行なつていないと云う事が云える。云いかえれば、リズムや旋律が、生徒の環境や日常生活とどの様なつながりを持つか。又音楽の流れがいかに人の心に働きかけているかを実際の音を通して直観的につかませ知的に理解させると云う指導法にあまり積極的でない事になる。

しかし、他方指導法ばかりに欠陥があるとは云えない。第二図の如く音楽を敬遠している生徒は少ないのである。では何故に面白くないのか。当時の音楽放送のねらいは、音楽の基礎形式を通して時



問 学校放送の中の音楽放送はためになると思いますか

問芸術としての音楽の音の流れ、秩序づけ、生活へ結びつける事にある。現代社会に於て音楽に親しむを感じる様な

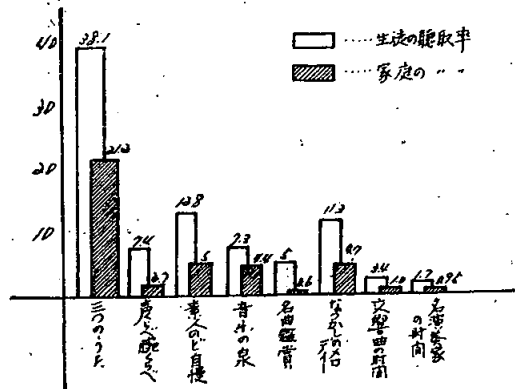
環境はなかなかあり得ない。ましてや学校に於て各人器楽によれ、そこから基礎形式を理解すると云う様な経験を通しての学習はとて不可能な話である。だから生徒自身にしても或る程度の自信をも持てず、故にこのねらいと実際の場合とに大きなギャップを生じる。経験を通して得られた或る程度の自信の上に、歌の旋律や器楽を奏して流れるメロディーや又、名曲の旋律に基礎形式がおりこまれるような指導法がなされるならば、それは循環し、生徒の生活に浸透し、あらゆる活動の実際に役立つて行くのである。

では、一般音楽放送について生徒はどの様な態度を示しているか。一般音楽放送の生徒の聴取の場が家庭にあるため、家庭を背景として考察しよう。

第三図は、一般放送についてどの様な番組を家庭及び生徒が聴取しているかを見たものである。質問を一般放送としたのは、一般放送の間において音楽放送の位置がどうであるかを見る為であった。

卒業論文

第三 圖



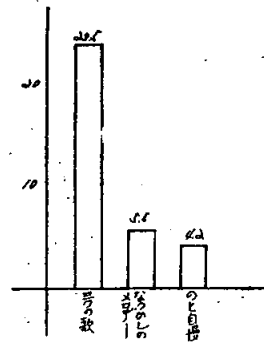
問 問 ラジオの音楽番組でどんな番組を聞きますか。
 (家庭調査)
 お宅では音楽放送の中でどんな番組をお聞きになりますか。

そして第三図を見てもわかる様に娯楽音楽としての三つの歌、素人のど自慢なつかしのメロディーが他の番組より群を抜いている外、鑑賞価値の高い音楽番組については約一割から五分の低い聴取率しか見られない。しかし、家庭人より生徒の方が聴取率が高いのは教育と云う範疇のある為だろう。

第四図は好きな音楽番組について得られた表である。これは前述の事実を更に強く証明するものである。何故純粋音楽が敬遠され娯楽音楽が受けるのだろうか。

近代社会に於ては、学校、会社、工場において、生徒や勤労者がその生活をたのしめる様な条件を備えていない所が圧倒的に多

第四 圖



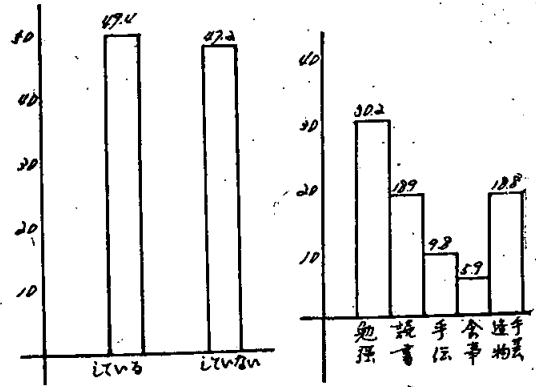
問 ラジオの放送番組でどんな番組が好きですか。

早くそこから解放され、楽しみを別な所に求めようとする傾向が強い。この様に現代的な社会生活を忌避してその外で現代的なものへの関心を満足させようとする。これが家庭に帰着する事は云う迄もない。だから音楽についても娯楽音楽へと人々が逃避する傾向にあると云う事が出来る。第四図の如く三つの歌の聴取率が今日に於ても圧倒的に多いのも、結局前述の如き逃避の世界を求めて来た人々がこの大衆性豊かな番組に引きつけられて行くのである。放送担当者は音楽家でもなくアナウンサーでもない。一般民衆である。そこに非常な近接感を感じ、又歌がおさな時に歌った童謡、そして小学唱歌、民謡、歌謡曲等にある時、人々は皆安逸な世界へと飛び込んで行くのである。

この様に大衆性のある娯楽音楽に対しても、聞きながら何等かの意味で次表に示される如く仕事をしている場合が多い。そしてその半数は勉強、読書をあげている。これは娯楽音楽のみならず全般的に云える事で、放送を聞いていない事になる。ラジオは音楽を(音楽のみならず全放送について云える事であるが、この場合音楽について記す)一般民衆に聴いてもらうだけの機関だけに過ぎない

い。むしろこの様な社会生活は勉強や勤労を強いる機会として感じられるために、その人々には出来るだけ

第五図



問 1) ラジオを聞いているとき聞きながら何かしていますか。
 2) (していれば) 何をしていますか。

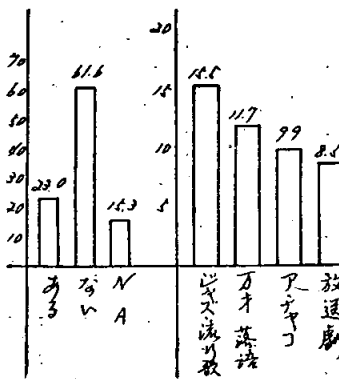
のである。聴いて鑑賞し、理解し、その表現力を養うのは聴取者側の責任である。故に100%聞いていると云う事は、一般大衆が音

確にしている。この様に約四割が困る音楽があると述べており、その番組として流行歌が圧倒的に多く、そして次にジャズ、ヤツトン節があげられているが、いずれも入ロディーリズム、そして歌詞が俗悪野卑なものばかりである事は今更言をまたない。
 今までの調査結果から見ても必ず問題点がジャズ、流行歌に見られたが、ではどうしてこの様な低俗野卑な音楽が一般大衆に受ける様になったのか、その分析をするかたわら原因をつきとめよう。
 敗戦に於ける日本の社会の一大転換により駐留軍向け英語放送は朝から晩までジャズを放送し、又商業放送は放送者側の利害関係からこれに拍車をかけ、そしてこれらがラジオのみでなく、レコードにふきこまれ、歌詞が雑誌にのり、即ちすべてマス・コミュニケーションによって流布された事があげられる。
 ではジャズ、流行歌が何故その様に魅力的なものであり、大衆の

楽に対して理解力鑑賞力がない事になる。この聴取者側の鑑賞力如何によつてそれは循環し大衆音楽は向上し又は頹廃するのである。故に勉強に専念する時はそのみに、そして音楽を聴く時はよく音楽を聴く事に専念しなければならない。一方、大衆を相手として企画されている放送は日本の家庭においては伝統的家族制度と相まつて他国より家族揃つて聞かれる場合が多い。この点からも家庭人は、子供にとつて教育上あまり思わしくない音楽放送と云うものに気がついているに違いない。

第六図はこれを一般放送からとりあげたものである。その中にジャズ、流行歌が高率をもつて指摘されており、次表はそれを一層明

第六図

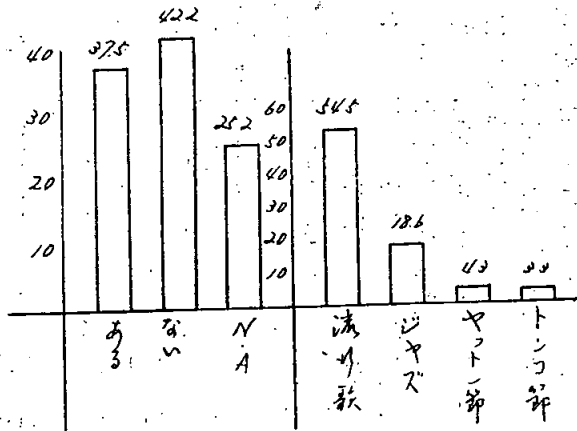


問 (家庭調査) お子さんに聞かせたくない放送がありますか。

求めるものなのである。ジャズ、流行歌たる大衆音楽を歴史上から見ると、その最も古典的なものは民謡である。民謡と

文 論 業 本

第七 圖



問 (家庭調査) 現在教育上困る音楽がありますか。

經て都市國家の發生と共に都市的大衆音楽とり、更に第一次大戦を経てその蔭から現われて來たものは、もはやあの前世紀のブルジョワジの音楽ではなく深刻な生活から生れ出した原始人の音楽、野生の音楽であつた。

この様な時代変遷のもとに個人に対する社會の圧力が増大するにつれて人々は受動的な逃走を始めたのである。これは云わば個性の放棄であつて、それと同時にそれによつて生ずる不安からの逃走であつた。生活や社會に対する潜在的な不安が常に現実と真正面にむかいあふ事を恐れ狂騒的なダンスを踊り考へる事を止め肉體だけを

は、民族が大自然にふれながら反面日常生活に強く結びついた音楽である。一步進んで云うならば農業國家的な起源を有してはと云う事が出来る。これがルネッサンスを

興奮させて自らの感覺を疏痺させる事を好むのである。これと共に我が國に於ける獨特の流行歌を考へて見ると、日本に於ける民謡は明治時代に一般ヨーロッパ文化の移植として輸入された。洋楽とは異つた音組織から生れたものである故に同一にする事は不可能である。このギャップに乗じて出て來たのが流行歌であると云える。この流行歌も徳川時代の三味線音楽に満足を感じなくなつた人々の自発的な欲求の表現で流行歌が發生したのであるが、流行歌がこの様に社會への不満を背景としてその自己不満から來た音楽であるだけにこの非合理的なものへの逃避の感情が根強く残つてゐると考へられる。この様な社會的過渡期を経てエレジーなるものが登場して來たわけである。ジャズが官能をゆすぶる様な音の色彩や喧騒とも云える位に活動的な音の響きであり、人は絶えず新しい感覺を追求してゐると云う事は前にも述べた。ジャズの和音が複雑で和音が重厚になり刺戟的となるとそこに音の面白味、又リズムの面白味が生れるのである。しかしこれを批判的に見ると、メロディーの面白味がなく、従つてリズムによつておぎなつてゐると云う事が出来る。即ちあくまでも官能的であるため心身共に動搖の多い青少年の衝動にすぐに結びつくのである。

流行歌についても同じ事が云えるのである。そこで若い人々は西洋音楽調を好み、歌詞には人の心をとらえ易いものが選ばれる様になつたのである。即ち、メロディーのみではまだあきたらず、歌詞の方にもその刺戟を求めた様になつたのである。それと共に商者の商魂も加わつて歌詞やメロディーがどうであろうと金銭になる様なものを作成する様になつた。これが悪循環をなして今日の様な現状を呈して來たのである。

文 論 業 卒

この様な歴史をたどつて、又その原因のもとに終戦後の日本に於てのジャズ、流行歌が圧倒的に支持される様になつたのである。一方、これに伴なつて、クラシック音楽は、歴史の背景と共に千変万化し、感情的にも芸術的にもより高度な音楽として現代にいたつてゐる。

音楽放送のあり方、聴き方

斯く、音楽放送につきその聴取状況の考察分析を概略したのであるが、帰着する所は社会の現象の是正、改良、向上という事は社会を構成する人間個人々々の責任であり義務である事を再認識しなければならぬ。

我々一個人個人が社会を構成してゐるといふなれば、我々の身辺を平和と幸福で充たしたい事はいふまでもない。この平和、幸福は社会人としての人間と人間の美しい結びつき即ち調和から生れるものである。この調和を結びつけるに一役かつてゐるのが音楽である事は多言をまたない。調和のとれた音楽こそ美しい人間のコミュニケーションを作るものである。又音楽は社会性が大きければ大きい程、美しいものであることを味わう事も出来る。音楽の本来の意義つまり人間と人間とを美しく温かく結びつける事から考えても、音楽の美しさを通じてたぐさんの人々が結びついて行く事によつて社会はもつともつと人間的になり、社会生活は浄化され高められて行くのである。その一つの手段が放送である事を考えればそれは軽視出来な事である。

従つて音楽放送を通じて感じる所の音楽に対する観念が問題なのである。即ち現在の日本では、あまりに雑多な音楽がきかれすぎ与

えられすぎている。為に何が音楽であり、何が音楽の本質かわからなくなつてしまふ。

経済的貧困、精神的不安、こういう社会にあつての唯一の慰安はそういう雑事から一瞬でも離れ、刺戟的なものへ逃避する事は納得出来るが、此れ等は容易に入りやすいだけに肉体的な興奮だけで後に残るものは、何もない。これは社会、少なくとも文化国家は社会建設の目的を遂行するにはあまりにも無責任な態度である。たとへ、個人的な一時的な逃避とはいへ、それが社会の集団となり、習性となつた場合には、その影響が一時的なものとしてではなく悪循環の原因になるわけである。

今此処で論じてゐる事は決して軽音楽の否定云々ではない。軽音楽が唯一の音楽あると考える事——考えさせられてしまつた事を遺憾に思つてゐるのである。大衆が求める、から発売する。受ける、ヒットする、から放送するといふ事によつてますます音楽の本質の把握を誤るわけである。

軽音楽をきいて、又芸術音楽をきいて受け手が判断するだけの能力をもつ事が大事なのである。此処までくれば何故必要か不必要かの問題ではな、その後にくる反応、影響の問題である。

何を生み出すかである。

それ故、教養的な内容をもつラジオプログラムの意義は我々の文化的な水準をたかめるためにもあるものであり、音楽放送の根本の方針は人々に音楽的諸能力を身につけさせこれを人間の日常生活経験と結びつける事にある。

音楽が社会あつて隆盛するのであつてみれば、音楽といふものが個人生活、家庭生活、社会生活のすべてを貫いてゐる事はいふまで

卒業論文

もない事であり、音楽を通して人間生活としての調和と秩序が保たれるならば、そこに眞の音楽的価値が見出される。

秀れた音楽的社会を創り出すというならば、それは、彈正的な表現をするならば音楽教育という事になる。音楽教育の根本方針こそ、音楽美の把握であり、この方針は學校に於ける教育のみならず、ラジオについてもレコードにおいても、その基本的位位置におかれなければならぬ方針であると同時に、この方針に従つてこそはじめて芸術家の教育と社会の教育とが一貫した綱によつて結ばれるのである。此処で教育という言葉が出たのであるが、青少年の調査からも、「音楽放送を面白く……三割、普通……五割」その理由として「興味がない」等とある。これは、生活からひき出された即ち日常經驗、感情生活と結びついた音楽教育を行なつていないと云う事が云々である。

音楽教育の内容及び規模を拡大すると云う意味は、音楽的創造における直接の生産者と社会との交互作用を明確に把握する事によりはじめて可能となるのである。即ち広い意味における音楽教育は優れた音楽的社会をつくり出す事が重要な目標である。したがつて音楽教育の問題は、常にこの観点から考えられなければならないのである。以上の如く優れた音楽的創造が行われ、且つ高い音楽生活が営まれる事が最高の目標であり、音楽教育がそれを目ざして行われるものとするれば、音楽教育のうちには、二つの大きな面のある事が考えられるわけで、即ち前述の音楽的直接的生産者であるいわゆる芸術家の教育と音楽的社会を形成する一般人即ち余り好ましい言葉ではないが、聴衆に対する教育である。

唯単に受身の立場にある聞き手という事でなく、音楽創造に積極的

に参加する社会としての意味に取るべきである。音楽教育の含むことの二つの面が有機的に綜合せられてこそはじめて正しい教育が行われ得るのである。音楽教育の根本方針は当然音楽美の把握、そしてそれを可能ならしむる音楽についての知識及び技術の習得という点に重点がおかれなければならない。これ以外に両者の教育を有機的に結びつけるものはなく、また音楽創造を本格的に行いいうる方法はないのである。

此の様な教育が効果的に達成せられる時國民は音楽的創造或いは音楽的現象に対してこれを批判的に分析しうる能力を持つことが出来るので音楽に於ける野卑な通俗性、頹廢的な感傷性、不健康な感覺性等は國民そのもの力によつて除去せられるのである。音楽とはどういふものであるか、又どの様な構造を持つてゐるか、そしてこれを創作し演奏するにはどうしたらよいか、又音楽はどの様な歴史的經過を経て發展してきたか、その様な問題を明らかにする事は音楽教育の立脚点である。この様な立脚点にたつて教育を進めつつ音楽美にふれ、これを通して高い人間性にふれてゆくのである。此の様に考へて行く時、教育する側として当然放送事業が問題となつてくる。即ち計画的な接触と自然的な接触という事で學校においては、計画的に行われても、社会という場合には自然的という事になる。無制限に多くの聴衆をもつラジオとしては教養趣味の異なる大衆を一通り満足させなければならぬ事は放送者側としても如何ともなしがたい事であるが、支持とか、人気とかいふ様な事や、商魂主義のみで聴衆に働きかける事に反省すべき点が多々あると思う。

音楽の本来の意義から遠くはなれてしまう様では社会生活にマイナスこそなれ、プラスにはならぬのである。問題は大眾の求めるま

卒業論文

まに放送する中にもその内容としての質、量を充分検討すべきで、無言の中にも良い方向への方向づけとなる様なプログラムであつてほしい。朝から晩までジャズ、流行歌ではもはやその余裕はない。

一方、学校においては、教育が人の生涯を通じて行われるものであり、その基礎を作るのが学校教育であるならば、学校教育は家庭教育に關連し、更に社会教育に發展するものである。この事は理念として明白であるが、実際には満足すべき程度にまで行われていない。学校教育は社会教育の地盤の上に展開せらるべきで学校はすでに一つの立派な社会である。教育の内容及び規模を拡大し、これを社会という地盤の上にする事は今後の重要な仕事の一つである。それと同時に学校教育と云うもののはじめに基礎教育としての価値を充分正しく發揮できるのである。この方針に従う事によつてはじめて従来の教育音楽という型を打破し、音楽は生活に直結する事が出来る。即ち音楽教師はリズムや旋律が生徒の環境や日常生活に實際の音を通して、直感的につかませ、或る面に關しては、知的に理解させるのでなければならぬ。

自分の口で歌つてゐる旋律や器樂を奏して流れ出るメロディーに、そして名曲の旋律に、この基礎形式を織りこませれば、それは、そのまますぐに生徒の生活に滲透し、あらゆる活動の實際に役立つばかりでなく、もう一步進んだ音楽への接觸からくる関心度は云々までもなく高まつて行くのではなからうか。

正しい、美しい音楽経験なしに正しい美しい音楽性は育成されない。まして音楽愛好の態度を育成する事も望み得ない。

斯くの如く教育する側(与える側と考えられるもの)とは逆に受ける側においても当然プログラムに対し又音楽に対する聞き方の正

しい姿があるべきである。換言するならば、鑑賞という事の問題である。

いわゆる刺激的、肉感的音楽、即ち、ジャズ、流行歌に対する鑑賞という事が問題になつたのは、つい最近の事であり、それが最切は、演奏者自身の楽しみから、演奏されたものが、クラシック音楽の場合の「聴くもの」と云う事と別な意味で「聞くもの」として発達して来た。いわゆる実用音楽から軽音楽なりに鑑賞音楽に進んだわけである。

この様な変遷のもとに当然鑑賞即ち聴き方という事が問題となるのであるが、現代の人々は、感覚的喜びのみにとどまつて聞く態度から聴こうとする態度までに至つていない。

鑑賞とは「芸術上の作品を鑑識して賞美すること」である。鑑賞するもの予備知識を得て、心をこめて聴いて初めて鑑賞したと云えるのである。この様な鑑賞が出来てこそ、初めてジャズ、流行歌の価値もみとめられ、大衆音楽確立へと方向づけられる様になるのである。この様な鑑賞が行われていたならば、現在のジャズ、流行歌はもつと地についた安定したものととして、發展してゐた事だらう。

此の様に、現在のジャズ流行歌が鑑賞されるまでの段階にいたつていないのに、青少年はすぐに、自分に結びつくこのジャズ流行歌を聞く事を欲する。正しい判断力の結びつかない青少年にとつてこれはむずかしい問題となつてくる。これには先ず大衆が聴く態度を養ひ、それに比例して鑑賞価値のあるジャズ、流行歌に転換させる事にある。

此れを先ず、家庭から、学校から、そして地域社会から、是正して行かねばならない。これには、マス・コミュニケーションに期待す

文 論 業 卒

る事が多い。青少年に限らず、人々は音楽を聞く事が必要なのである。青少年の心情より高い靈的レベルまで高める音楽を他の民族の正しい認識をのべ、彼等の生活態度や感情に洞察をもたらす歌や音楽を、そして日本の音楽や外国のすぐれた音楽を聴く事が必要なのである。そして青少年は更に音楽を理解し、鑑賞するために学校で習う音楽について理解する事が必要なのである。この必要に基づいて青少年に音楽経験を与え、鑑賞能力を養い、正しい音楽性を生み出すに必要な音楽的家庭環境及び社会環境が統合されるならば、青少年の情操教育は向上する途上にあると云える。

ヨーロッパの子供たちが幼い頃から教会へ行つて芸術的環境に育つて来ている故群集の中で二人、三人が歌を歌うと、その歌はやがて大合唱になるといふ光景は、何処でもみられる。此れは生活環境の相違であつて、我が国に於けるが如き音楽観念とは大分違ふ。輸入音楽として、又大衆の求める音楽をその洋楽の中から特に入りやすいジャズの軽音楽に求める事により、又、口に軽く出てくる流行歌の流行という事がどの様な影響を与えるかを考えた時に、前者とを比較して此所に環境問題が当然論じられるものである。

調査した学校が四校とも、工場地帯、下町花柳界、商業地帯といつた環境で、ジャズ、流行歌の（家庭の）聴取率が高い事を示している。

日本が流行歌のみを追いまわしている音楽環境にあるからこそむずかしい問題で、日本の音楽を一層高い水準にあげるためには、自らそこに高い文化的水準をもつた環境といふ事が問題となつてくる。文化の水準といふものは、時間と人間との多数によつて築かれて行くものである。この水準こそ音楽のみでなく日本自体のあり方

の問題に帰着する。

そこに政治、経済、風土までが秀れた音楽を生む要素である事を考えなければならぬ。情操豊かな人間は健全な社会を築き、健全な国家を構成する重要な要素である。といふ事は、音楽が芸術である以上、音楽美の表現と理解といふ事になり、さらに進んでその美の根底に横たわる人間性にふれる事なのである。美は人間が生み出すものであり、従つて美の中には、常に人間性が反映している。故に美にふれる事は、それを通して人間にふれることなので、それが美にふれるものの人間性を豊かにし、又情操を美しくするのである。

音楽が手段である事は誤りで、音楽はそれ自身で目的である。何故ならば、良い音楽は直接高貴な人間性の発露であるから、そのよいうな音楽美に触れる事によつて直ちに人間性がたかまるのである。故に情操豊かな人間が健全な社会を築く要素であるわけである。

日本が後進国であるといふハンデイヤップは、如何ともなしがたいが、国際的な国交である現在、洋楽の発露につとめ、この洋楽を通して豊かな人間性を創り出し、一方日本古来の邦楽をも民族音楽として長く保存し、楽しく明かるい音楽社会をきずく様に努力しなければならぬのである。

ハーモニーの在る健全な社会を青少年が、成人が、そして社会一マス・コミュニケーションが築きあげられなければならないのである。